臨床心理系大学院生の学びでの傷つきに関する質的研究

柏木雄太　　田中美佐子　　新田泰生

A qualitative study on injuries in learning of clinical psychology graduate students

Yuta KASHIWAGI, Misako TANAKA, Yasuo NITTA

【要　約】

本研究では，臨床心理士を目指す大学院生の，学びに関する場面での傷つきにまつわる体験に焦点を当て，大学院を修了するまでの内的な変容プロセスについてのモデルを生成することを目的とした。5つの臨床心理系大学院（第一種指定）を修了した10名を対象に半構造化面接を実施してデータを収集し，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて質的に分析した。その結果，臨床心理士を目指す大学院生は初期に，《臨床心理学文化の入り口に立つ》ことを経験する。ケースの開始と共に《ケースに出る未熟さ》と直面する。中期では〈限界を許せずに抱いてしまう怒り〉などからなる《未熟さから起こる学びの滞り》や，〈構造が守られないことから生まれる傷つき〉が起こる。終期では，《時間経過による不安と焦り》を経験する。また，〈自己変容へのストレス〉などからなる《深化する自己内省に伴う痛み》を経験し，大学院を修了する過程が示唆された。

キーワード：臨床心理士養成，内的体験プロセス，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA），傷つき体験

Ⅰ．問題と目的

近年，我が国では臨床心理士を目指す人口は増加傾向にある。土居（1991）は，臨床心理士の専門性について，人間性を土台にしないような専門性では意味がなく，人間性と専門性は相補的な関係にあると述べている。

臨床心理士を目指す大学院生は，臨床心理士として活躍していくために大学院では自己省察が求められる。岩壁（2007）は，セラピストは専門技術や知識よりももっと深い個人的な関りを一人の人間としてクライエントにしており，それが治療的効果に欠くことのできない部分であるためにセラピストにとって自己の内面に起こっていることに注意を向け，それを理解することが，セラピストの職業的機能を高めるために重要であると述べている。自己省察の求められる大学院での過程の中では傷つくことや，傷ついてしまうのではないかと恐れて何もせずにいてしまうことが考えられる。岩壁（2007）では，初学者のケースカンファレ

ンスで失敗を大勢の前で咎められる場面で，学習体験にならずに，一種の「トラウマ」「傷つき体験」になることを例に挙げ，失敗に対するセラピストの敏感さは大学院での訓練期間中に高まっていくことについての考察を述べている。

自分が見ていなかったことや自分が気づいていなかったことに直面したり，焦点が当てられたりする際の反応の内の一つに，傷つくというものがある。その例として，カウンセリング場面において，自分の中の傷つきが未消化で，受容できていない部分と似た部分を持つクライエントを前にした時に共感しづらくなってしまうことが挙げられる。自己が体験に開かれる糸口の１つとして，傷つきというものが関わってくるのではないだろうか。臨床心理士として成長していくためには傷つきにまつわる体験と付き合っていくことも大切である。

また，臨床心理士を目指す中で丸々全て素の自分のままでは居られない場面も出てくるだろう。今田（2013）では，セラピストを目指す現代の若者について「現代の若者にはどこか素朴に，『素の自分』というものが尊重され，『そのままの自分』であり続けながら自分の目指すもの（本項の場合ではセラピスト）に成りたい，という願望が殊の外大きいのではないかということに気づかされた。これは筆者の主張するように「何者かになりたければ今の自分から別の自分に変わるしかない」あるいは「『素の自分』とは別の存在である，『専門家としての自分』を徹底的に鍛錬することを抜きにして臨床家たり得ない」という概念とは相容れぬ，ほとんど正反対といってもいい程の隔たりが存在する。」と述べている。指導教員の考え方にもよるが，自分の在り方がトレーニングをしている学生にとって学びの妨げになってしまうことは通り得る道ではないだろうか。それが負担となり，傷つきに繋がることも考えられる。自分がプロフェッショナルになっていくために支払う税金のようなものと表現することもできるが，その税金の中身についての仮説を知っておくことも今後大学院の道へ進む学生のために役立つと思われる。

そして，大学院で教鞭をとっている者も人間である。人間は過ちを犯すものであり，完璧な存在ではない。運用者も人間であるため，そのルールが守られないことというのはしばしば起こり得る。その際にも学生は傷つくだろう。大学院の中で過ごす２年間の中でそうした構造が破られてしまう現実を体験者から語ってもらい，モデル化することで，より大学院での学びの安定に繋がるのではないだろうか。

筆者自身もまだ道半ばであるが，大学院生活の中で上記の傷つきにまつわる体験をしてきた。学びのために通ってきているのにも関わらず，それが妨げられてしまうことは生産的ではない。そこには，学生自身の課題と大学院運営側の課題とが混在していると思われる。筆者はそこにある現実を研究という俎上に乗せて見つめていきたいと思っている次第である。そして，研究の種類としては質的研究が望ましいと考える。

次に，傷つきにまつわる体験に焦点を当てながら先行研究を概観していく。村上・守屋（2013）は，一時保護所の宿日職員の子どもとのかかわりにおける不安や傷つきについてM-GTA を用いた研究をした。そこでは初期には苦しい思いをしてきた子どもへ何かしてあげたいとする理想・願望があり，役に立てない自分との現実とのギャップに落ち込むものの，自分に出来ることと出来ないことが段々わかっていくにつれて，理想・願望や使命感が薄れていき，身の丈の自分を受け入れることで肩の力を抜き，自分に合った関わり方が出来

るようになっていくということが述べられていた。

臨床心理士を目指す大学院生の内的変容についての質的研究として，大橋（2016）は臨床心理士養成過程２年間を通しての自分を見つめる自己理解の変容について M-GTA で研究を行った。大学院生は教員からの指摘をきっかけに漠然と否定的な自己理解を生じさせ，ケースを通して，向き合わざるを得ない課題や感情体験と接していく。ケースを通して自分を見つめる中で，失敗に傷ついたり，こうあるべきという自分などの抗うような感情体験をしつつ，体験を意味付けし直したり，感覚の大切さに気付いたりする。そして自分の否定的な面を受け止め始め，この自分からやっていこうという自己受容の入り口に立っていく過程が見られた。

また，割澤（2016）は臨床心理士指定大学院における学生の学習プロセスの個人差を捉えることを目的に M-GTA での研究を行った。大学院生の学びのプロセスにおいて，何をどのように学べばよいのか分からず混沌としている状態である，捉えどころの分からなさが見られた。また，経験不足や，知識や助言の絶対視，他者からの否定的フィードバック，技量豊かな他職種専門家の実践の目撃に伴う「専門性」の混乱からなる「専門家として未熟な自分」の感覚や判断の信頼できなさが見られた。また，割澤はインタビュー対象者を体験している段階ごとに４つのグループに分けた。その内１つのグループでは，適応の難しさと出会うと前述の２つの現象に揺れ戻ってしまい，そこに留まってしまう様子が見られた。その中には傷つきにまつわる体験があるだろうと予想できる。

臨床心理士を目指す大学院生の傷つきにまつわる体験について，内的変容についての質的研究はまだ少ない。また，体験者の生の声を活かしながら分析することで，教育現場へ還元できると考えられる。

そこで本研究では，臨床心理士を目指す大学院生の養成課程（2 年間）において，学びを通じた傷つきにまつわる体験との付き合い方の変容プロセスに焦点を当て，モデルとして生成することを目的とする。

Ⅱ．方法

分析方法は，修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下，M-GTA）を用いる。M-GTA とは，ヒューマンサービス領域の研究に適しており，研究対象として現象がプロセス的な特性を持っている場合に適している分析法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチが，木下によって修正されたものである。（木下，2007）。M-GTA は社会的相互作用に関係する人間行動の説明と予測に優れ，限定された範囲内の分析に力を発揮する。今回 M-GTA を用いる理由は，本研究が M-GTA の理論生成，社会的相互作用，プロセス性，実践的活用という４つの理論特性に合致していると考えられるためである。

調査方法は，機縁法により収集した調査対象者に対して，90 分程度の半構造化面接を実施する。この時，調査目的を説明し，プライバシーに配慮するなどのインフォームド・コンセントを行った。そして，調査対象者の同意を得た上で IC レコーダーに録音した。半構造化面接において定めた質問項目は以下のとおりである。大学院１年生を初期，大学院２年生

夏までを中期，大学院2年修了までを終期とし，それぞれ授業場面，実習場面，ケース場面，生活場面について傷つきにまつわる体験とそれとの付き合い方についてのエピソードを聞くものとした。

調査対象者は5つの臨床心理系の大学院（第一種指定）を修了し，修了から3か月以内の者を目安に10名とした。なお，事前に「研究倫理遵守に関する誓約書」の内容を説明し，同意書に署名を得たもののみを調査対象者とした。分析対象者の男女比は2：8であった。

分析手続きについて，ICレコーダーに面接を録音し，逐語記録を作成した。その中で最も多彩且つ一般的であると考えられる内容を語る者を最初の分析対象者に設定した。分析テーマと関連する箇所を抽出し，それらを概念化し分析ワークシートを作成した。分析ワークシートには，概念名，定義，具体例（バリエーション），理論的メモを記入した。それぞれの概念に類似した具体例をデータから抜き出し分析ワークシートに追加した。生成された概念同士の関連を検討し，サブ・カテゴリーでまとめ，それぞれのサブ・カテゴリーの関係性を検討しプロセスの流れを結果図として示し，ストーリーラインを作成した。

Ⅲ．結果と考察

1．ストーリーライン

M-GTAによる分析により5つのサブ・カテゴリー，16の概念が生成された。概念の関係からストーリーラインを検討し，結果図を作成した（図1）。以下，《》はサブ・カテゴリー，〈〉は概念を示す。

臨床心理士を目指す大学院生は初期に，〈授業での分からなさを不安に思〉う。そして，今までの頑張る一辺倒であった価値観だけではない価値観と出会ったり，臨床心理士としてある自分と大学院外の自分が混ざったりする現象の〈臨床心理文化との出会いによるショック〉を受ける。そして，外部実習で現場を目の当たりにしつつ，どう行動していいのか分からない感覚である〈外部実習で意思決定に戸惑う〉経験をする。ケースを持ち始めてからは，自分がカウンセリングを上手く行えているのか，上手くいっていないのかすら分からない〈カウンセリングの曖昧さと出会う不安〉と接することで《臨床心理学文化の入り口に立》つ。また，ケース場面では〈SVor.の助言を鵜呑みに〉してしまい，SVor.の指示の意味を自分の中で理解できていない，自己一致が出来ていない状態のままカウンセリングに臨むことや，クライエントにとってタイミングの良くない介入をしてしまいクライエントを傷つけてしまう。

他にも自分の未熟さ，経験不足さによりクライエントを傷つけてしまったり，中断させてしまったりした経験から〈ケースを通した自分の未熟さに傷つ〉く。それらを通し《ケースに出る未熟さ》と直面する。

中期では2つの概念からなる，《未熟さから起こる学びの滞り》が起こる。カンファで自分の考えはあるものの相手を傷つけてしまうことで実のところ自分が傷つくことを恐れ発言できない〈カンファで傷つきたくないためにかかる主体性へのブレーキ〉が1つ目の概念である。そして実習先やSVの時間，同期とのコミュニケーションなどで，自分にある課題に

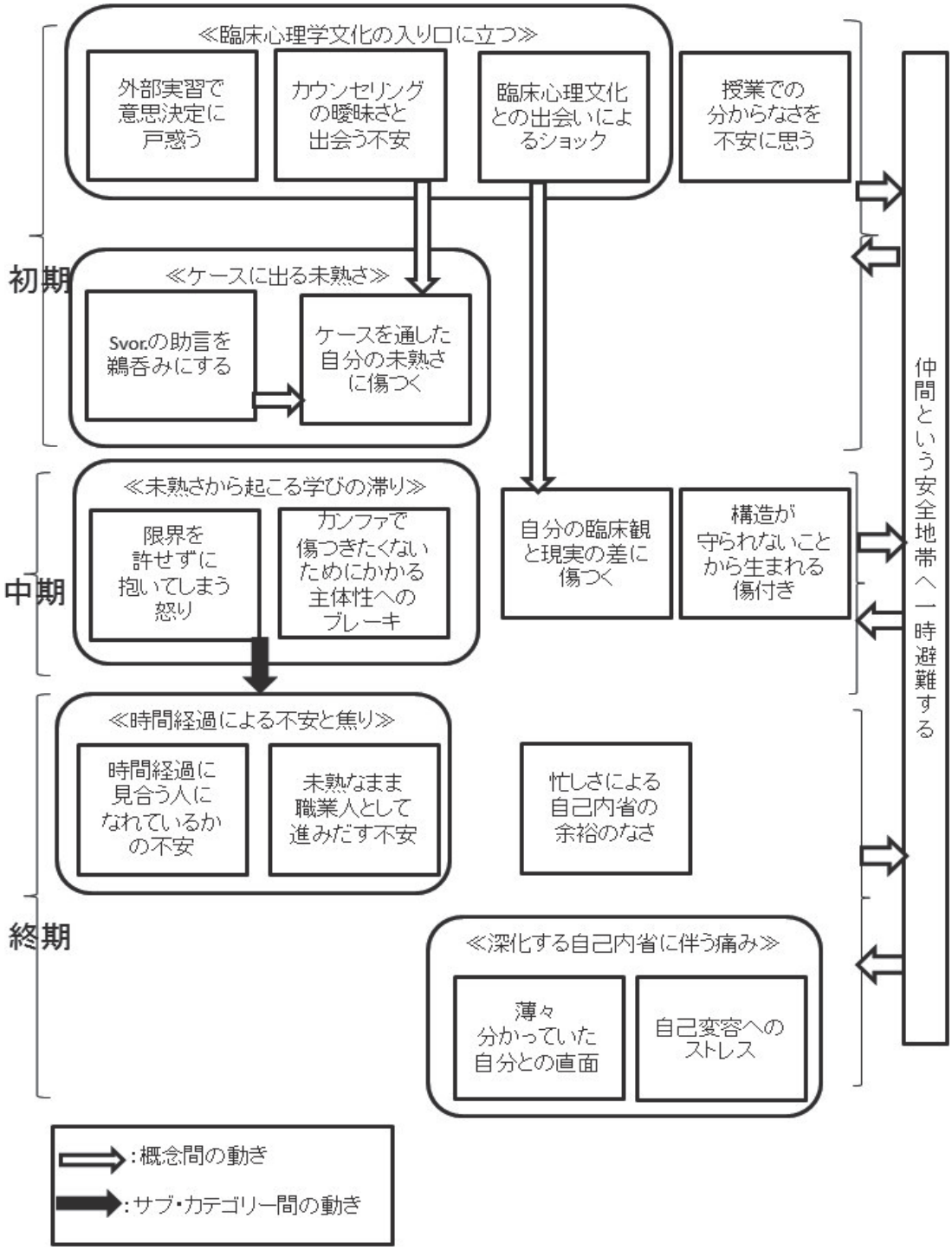

図 1．臨床心理士を目指す大学院生の傷つきにまつわる体験との付き合い方のプロセス

目を向けられずに怒りの感情へと変換してしまい内省へと向かわない〈限界を許せずに抱いてしまう怒り〉が２つ目の概念である。また，初期から築いてきた臨床観と異なる現実を実習場面で見ることで〈自分の臨床観と現実の差に傷つく〉。そして教員側の要因によって構造が守られず，院生が傷ついてしまう〈構造が守られないことから生まれる傷付き〉が起こる。

終期では，カンファ中に発表する際に後輩にとっては１年経験を積んできた人として，教員からは専門家としての視線を向けられるプレッシャーを感じる〈時間経過に見合う人になれているかの不安〉を経験する。また，大学院での２年間では一人前の職業人として耐えうるものは持っていないと感じる〈未熟なまま職業人として進みだす不安〉を経験する。この２つの概念から，《時間経過による不安と焦り》を経験する。また，実習などその場その場での〈忙しさによる自己内省の余裕のなさ〉を経験するものの，それとは対照的にこれまでの２年間で少しずつ整理されてきた自分の課題と直面する〈薄々分かっていた自分との直面〉を経験し，入学前と比べて変わってきた自分に対し少し寂しく感じたり，受け入れがたさを感じたりする〈自己変容へのストレス〉を意識化する。《深化する自己内省に伴う痛み》を経験し，大学院を修了する。

また，初期，中期，終期通して〈仲間という安全地帯へ一時避難する〉ことで，傷ついても安全な場所から傷つきや傷つきのもとになった出来事を観察し，現実にもどっていく過程が示唆された。

2. 生成されたサブ・カテゴリー，概念

M-GTA による分析によって生成されたサブ・カテゴリー，概念を以下の表１に示す。

表 1．作成されたサブ・カテゴリー，概念

サブ・カテゴリー	概念名	定義
	授業での分からなさを不安に思う	自分の知識の無さ，理解のできていなさを不安に思うこと
臨床心理学の文化の入り口に立つ	臨床心理文化との出会いによるショック	臨床心理の文化と出会い，今までの価値観が相対化され衝撃を受けること
	外部実習で意思決定に戸惑う	外部実習先で自ら何かを決めて行動しなくてはならない場面で選択ができず，分からなさを抱えること
	カウンセリングの曖昧さと出会う不安	カウンセリングで上手くいっているのか，どうして良かったのか分からないという感覚に出会い，不安になること
ケースに出る未熟さ	SVor. の助言を鵜呑みにする	SVor. に言われたことを鵜呑みにし，すぐ実行してしまうことでセラピーが上手くいかなくなってしまうこと
	ケースを通した自分の未熟さに傷つく	ケースを通して自分の未熟さに気づき，傷つくこと
	自分の臨床観と現実の差に傷つく	自分の臨床観とは異なる臨床の現実と触れて傷つくこと
	構造が守られないことから生まれる傷付き	構造が守られないことによって傷つくこと

未熟さから起こる学びの滞り	限界を許せずに抱いてしまう怒り	自分の限界について怒りを用いることで見ないようにしてしまうこと
	カンファで傷つきたくないためにかかる主体性へのブレーキ	カンファで相手を傷つけたり，自分が傷ついたりすることを恐れてしまい，自分の感覚を確かめられないこと
	忙しさによる自己内省の余裕のなさ	忙しさから自分を見つめる余裕がなくなること
時間経過による不安と焦り	時間経過に見合う人になれているかの不安	時間の経過と共にそれに見合う院生になれているかの不安がカンファの場でそれが表出すること
	未熟なまま職業人として進みだす不安	今の自分ではまだ職業人として未熟と思い不安になること
深化する自己内省に伴う痛み	薄々分かっていた自分との直面	自分について薄々は分かっていたものが養成課程で意識化されてくること
	自己変容へのストレス	大学院で訓練を受けている中学んだことが日常生活に影響し，それにストレスを感じること
	仲間という安全地帯へ一時避難する	傷つきについてお互い分かち合いながら，自分の傷つきと距離を取ること

3. サブ・カテゴリー，概念ごとの結果・考察

本説では初期，中期，終期それぞれの時期順にサブ・カテゴリー，概念ごとの結果・考察を述べていく。

3-1. サブ・カテゴリー《臨床心理学文化の入り口に立つ》の結果と考察

サブ・カテゴリー《臨床心理学文化の入り口に立つ》は，「大学院初期に授業や内部実習，外部実習を通して臨床心理学の難しさと出会うこと」である。このサブ・カテゴリーは〈臨床心理文化との出会いによるショック〉，〈カウンセリングの曖昧さと出会う不安〉，〈外部実習で意思決定に戸惑う〉という3つの概念から構成される。以下，詳細を述べる。分析対象者の具体的な語りは「」内に*イタリック体*で表記する。

〈臨床心理文化との出会いによるショック〉とは「臨床心理の文化と出会い，今までの価値観が相対化され衝撃を受けること」である。分析対象者3名，計3つのバリエーションから生成された概念である。「*臨床は頑張って乗り越えるものじゃないみたいな感じの授業，まあ皆と話し合ったり，フォーカシングやったりとかした時に，そういう体験をして色々フィードバックとかもらった時に，今までは大きな悩みとか，困ったりしたときに，頑張って乗り越えてきたというのが大きくて。頑張って乗り越えて成功してきた部分が多かったから，今の自分があるのはそれが大きいって，ずっと思ってて。でも，臨床では頑張って乗り越えるものだけじゃないっていうのを知った時はなんか，今まで自分がやって来たことって何なんだろうみたいな。傷つき，ショックで。なんか，頑張らなくても，乗り越えられたのかなあ……，頑張らなくても良かったんじゃないかなとか，なんか，結構自分って無理するタイプだったんだってことに直面して，傷ついた，かな。（中略）新しい価値観だったというか，無理して乗り越えるものじゃないというのが。そう思ってる自分を優しく包んであげるという意味が分からない！(笑)*」という語りから，今までの価値観が臨床心理学の授業の

中で臨床心理の文化と出会い，揺るがされている様子が語られている。

〈カウンセリングの曖昧さと出会う不安〉とは「カウンセリングで上手くいっているのか，どうして良かったのか分からないという感覚に出会い，不安になること」である。分析対象者３名，計３つのバリエーションから生成された概念である。「*クライエントさんに，自分がどんな風に映ってるんだろうっていうか，ここに来て話をして，どう思ってるのかなとか。それが結局自分がうまくやれてるのかなってことだと思うんですけど。（中略）その，イニシャルケースなので，ケースっていうかその，カウンセリングとしてちゃんとなってるのかなみたいな（笑）そういう不安がすごく大きかったですね。（中略）そうですね。こう，正解とか，こういう道をたどっていくとかそういうはっきりしたものってないじゃないですか。やってて手ごたえを感じるというのもなければ，失敗しちゃったなっていうのも感じることができない。やっていて。それがないのが不満で。これはこれでいいのか。ちゃんと，なってるのかなって。そういう感じですかね。*」という語りから，カウンセリング場面において，はっきりした手ごたえや失敗を感じられずに不安を感じている様子が語られている。

〈外部実習で意思決定に戸惑う〉とは「外部実習先で自ら何かを決めて行動しなくてはならない場面で選択ができず，分からなさを抱えること」である。分析対象者３名，計４つのバリエーションから生成された概念である。「*実習先はとにかく自分の立場は何だみたいな感じ（笑）うん，何をしたらいい，何を求められているのか何をすべきかもわからなくて，右往左往みたいな感じで，特に最初は無力感的なものが強くて。無力感強くて。（中略）やっぱプロ達に囲まれてるのでその，その中で自分がどういう風にしたいかっていうのを見つけるのも大変っていうか。*」という語りから，外部実習先で右往左往しつつも何をすべきかも分からなくなっている様子が語られている。

〈臨床心理文化の出会いによるショック〉では価値観について，〈カウンセリングの曖昧さと出会う不安〉，〈外部実習で意思決定に戸惑う〉では具体的な行動に伴う傷つきにまつわる体験と伴いながら直面している。初期の段階では臨床心理学について学び始める前なので，その文化自体について触れるところが傷つきにまつわる体験になるという事は起こり得ると考えられる。

〈臨床心理文化の出会いによるショック〉では頑張る事が絶対的な価値観だった院生にそれだけではないという価値観が示され相対化が起こっている。クライエントの中には頑張る一辺倒で生きてきたが，そこに限界が来てしまった人もいる。そうした人を理解する際に，セラピストの中に物事を相対的な価値観で見る目が必要である。久羽（2018）は「心理臨床かは自らの専門性に自信を持つと同時に，自らの視点が相対的なものである（自分に見えていないものがある）という点で謙虚である必要があり，この謙虚さを通じて，人の心に思いを巡らせる余地を場の中に生み出していく。この姿勢は，心理臨床の専門性の重要な一側面である。」と述べている。この現象は相手の中に自分に見えていないものがあるというまなざしを持つ姿勢を取り得るための第一段階として，自分の中にある価値観を相対化させるというステップだと考えられる。第一段階として傷つきにまつわる体験が起こっているのはSullivan（1953/1990）で体験を構造化することが学習であり，これまでの体験から編成して

きた自己組織というものがあると述べられている。この現象はその自己組織がセラピストとしての人格の変容を妨げていることの表れなのではないかと考えられる。

また，〈カウンセリングの曖昧さと出会う不安〉，〈外部実習で意思決定に戸惑う〉では具体的にケース場面や実習場面で上手くいっているのか，上手くいっていないのかどうかすら分からない，自分の立場からなにをしていいのかが分からないなどの体験をするということは，現場に近い場面で自分の振る舞いを見つめ，どうあればいいのか内省を始めていると考えることが出来る。

3-2. 概念〈授業での分からなさを不安に思う〉の結果と考察

〈授業での分からなさを不安に思う〉とは，「自分の知識の無さ，理解のできていなさを不安に思うこと」である。分析対象者3名，3つのバリエーションから生成された概念である。以下，詳細を述べる。分析対象者の具体的な語りは「」内に*イタリック体*で表記する。

「*授業とかだと，なんかわからない授業とかもあって，何の話をしてるんだろうっていう授業とかもあって，まあ，それも付いていけてないのが，うーん，モヤモヤ感というか。うーん，なんか，分かんないなっていう感じのままっていうのもあって。先生に聞いても，うーん？　みたいな感じのとかもあってそん時は，なんか，やってけんのかな？　っていうのがあって。（中略）そうです。院でやってけるのかと，あと，修了した後に，こんな感じで働けるくらいの資質というか，そういうの身につくのか思うのとかもあって。*」という語りから，授業での分からなさかさから不安を抱いている様子が語られている。

授業での分からなさが現在の自分についての不安だけでなく，語りからは将来の自分への不安も抱かせていると読み取れる。また，対象者の中には社会人を経験してから入学した者もおり，学部からそのまま進学してきた者と比べて積み上げてきたものが少ないということを不安に思っている語りもあった。社会人入学者は学部進学者と比べると勉強に割ける時間も少なかったことも考えられる。勉強からは離れていたという自己イメージがあるのではないだろうか。社会人入学者と学部からの進学者によって不安の質は異なることが示唆されている。

3-3. サブ・カテゴリー《ケースに出る未熟さ》の結果と考察

サブ・カテゴリー《ケースにでる未熟さ》は，「ケースを通して自分の未熟さと直面すること」である。このサブ・カテゴリーは〈SVor. の助見を鵜呑みにする〉，〈ケースを通した自分の未熟さに傷つく〉の2つの概念から構成される。以下，詳細を述べる。分析対象者の具体的な語りは「」内に*イタリック体*で表記する。

〈SVor. の意見を鵜呑みにする〉とは「SVor. に言われたことを鵜呑みにし，すぐ実行してしまうことで，セラピーが上手くいかなくなってしまうこと」である。分析対象者3名，5つのバリエーションから生成された概念である。「*うちの大学はジャーナルって事例論文を一本書かないといけないので，（中略）大体皆イニシャルしか書けないんですけど時期的に。（中略）そこでも皆，自分の悲惨なケースと向き合って書くんですけど。そこで，もう，そこで博士の先輩が査読って形で意見言ってもらえるんですけど。そういう時でも皆，*

突然ここで何があったの？　って感じだと，その前の回でケースカンファに出してなんとか先生にこれ聞いてないのって言われたので聞きましたとか，こう言われたんでこういう風に面接展開しましたっていうのがよく起こるんですけど。（中略）私もそれで。先生から言われることも一理あるんですけど。でも，自分の中でそれを聞く必然性とか，このタイミングでそれを聞いてどうするのかっていうのが明確になってないまま，あの，とにかく言われたまんま聞いたって感じで次の回聞いたりしてて。それも今振り返ったり，ジャーナル書いてるときに振り返ったりした時には，でも結局何も分からずに，言われたまんまやって，それも回収できてないし自分でっていうところで，あーあっていう第二の傷つきが（笑）」という語りから，SVor. からの助言をそのまま鵜呑みにしてしまい，カウンセリングでその通り行い，その結果急な面接展開になってしまい，そのフォローも出来ていなかったという様子が語られている。

〈ケースを通した自分の未熟さに傷つく〉とは「ケースを通して自分の未熟さに気づき，傷つくこと。」である。分析対象者３名，３つのバリエーションから生成された概念である。「*あるクライエントさんを新規で持つことになって。（中略）イニシャルケースというか。その人をやるってことになって。最初はすごいやる気満々だったんですけど。さらにSVの先生精神分析だったんですよ。そうするとその方に対して，子供の頃の話を聞かないといけなくて。大体インテークから２回目くらいまで子供の時の話を聞きましょうってなってて。（中略）その話を結構聞いてて。勿論説明はしたんです。最初は子供の頃の話を聞かせてくださいねって。話を聞いていたら，そのクライエントさん結構傷ついちゃったんですよね。話をしている時は普通にされているんですけど。子供の時はこういうことがあって，すごく嫌な思いをしたって，淡々とと言うか，少し感情は籠ってるけど，無事に話し終えて帰るんですけど。そしたら実はその時すごく傷ついてて，嫌な，すごく嫌なことを頑張って話してたみたいで。その後数回来ていたんですけど来なくなっちゃって。あとで電話で聞いたら，子供の時の嫌なことを話したのに，話を聞いたのにあなたは何も言わないですよねって。何もアドバイスがないんですよねとか，話をしても，何も言ってくれないから壁に話をしているみたいんだとか言われて。（中略）そういうのを後で電話で聞いて。いやあもうそん時は傷ついた，傷ついたっていうか何ていうか，やっちゃったなって，失敗したって。全然上手くできなかったみたいな。すごいだから落ち込んでたのかなあん時は。（中略）落ち込んだって言い方があってるのか，少なくとも陰性の感情はあったと思う。嫌だったなって。（中略）すごい責められて。だからこの人にとって私は本当に，本来ならば支援する立場なのに嫌な思いをさせちゃったんだなあって思うと，何ていうかね，やっぱり，非力とか以前の問題ですよね。傷つけちゃったんだから。傷つけて帰しちゃったんだから。そういうなんとも，なんか，カウンセラーの卵としてはやっぱり嫌な体験。こんなことがもしあるんだったら二度とイニシャルケースは取りたくないって。そんな感じ。嫌だったななんか，落ち込みもあるし怒りもあるし。*」という語りから，クライエントを傷つけてしまった経験から自らの非力さを感じ，傷ついている様子が語られている。

セラピストとクライエントはカウンセリング時間中は同じ時間を共にしている。セラピストは面接室や決められた時間，契約など物質的精神的な治療構造を用いてクライエントと距

離を取りながらカウンセリングを行う。しかし，そこで行われているのは対話であり，転移や逆転移が起こることなど，お互いに誰かと重ねて話していること分かるように，2人だけの関係でありながらそれだけでは終われない関係が起こっていることが考えられる。初期の院生はそうしたケース場面でフォローも出来ないままクライエントを傷つけてしまうという経験から，自分自身も傷つけてしまうことが考えられる。さらに，そこにSVor.の存在も絡んでくる。初期の院生にとってSVor.はカウンセリングの経験者であり，自分の知らないことを知っている人である。インタビュー対象者の語りの中では神の声と表現している者もいた。こうしたことから，院生にとってはまるでカウンセリングの正解を知っている人に見えるのではないだろうか。そこで言われたことを鵜呑みにしてしまい，自己一致もできていないまま自らの言動でクライエントを傷つけてしまった場合，そこには傷つきが生まれ得る。Rogers（1957/2001）は人が自分自身のなかにある不一致に全く気付いていない時には，不安と分裂の可能性にさらされることと，ある経験があまりにも突然に，あるいはあまりにもはっきりと起こってくるときには，こうした不一致を避けることが出来ないかもしれず，不一致の可能性にさらされると述べている。院生にとっては，ケース場面では突然クライエントからSVor.にコメントされたことに関する状況が提示され，SVor.の存在やコメントはセラピーを実施した経験の無い初期の院生にとってはため，はっきりと今SVor.に言われたことを活かしてなんとかしなくてはならないと思える状況になることが考えられる。そして，自らはそうしようと思っていないにも関わらず，SVor.の言われるままに振舞った場合，それは院生にとっての不一致の危機になると考えられる。これが〈SVor.の助言を鵜呑みにする〉という現象において傷つきにまつわる体験になっていることが示唆されている。

山田・小林（2018）では看護系大学の学生が臨地実習を通して「個人の特性」のコンピテンシーを形成していくプロセスについてM-GTAを用いて研究した。その初期の概念に「患者への看護実践の必要性や指導された内容の理解，納得が得られていないが，経験者の意見や行動をそのまま受け入れて同じように実践してみること」という定義の〈とりあえずやってみる〉というものが生成されている。指導の内容の理解，納得が得られていないまま実践してみるというところは〈SVor.の意見を鵜呑みにする〉と似た現象であると考えられ，本概念は転用可能性があると考えられた。

また，ここでは院生だけでなく教員側も目の前にいる院生に対して，助言に加え，その行動に伴う介入のタイミングを伝えるなどの工夫や，院生のアセスメントを慎重に行うことが大切になってくると考えられる。

〈ケースを通した自分の未熟さに傷つく〉では主にイニシャルケースについて自分がうまくできなかったことについて語られていた。しかし，その後その傷つきをSVor.へ語れたという語りは少なかった。ケースで起きたことはSVの場でSVor.に相談していくことが望ましいのだが，現実として今回のインタビュー対象者ではそうした語りが少なかった。それは初期においてSVor.と院生のシステムがうまく機能していないことを示唆しているのではないだろうか。《ケースに出る未熟さ》ではSVor.から院生へ院生の傷つきも抱えてあげられるような関わりも必要であることが示唆されている。

3-4. 概念〈自分の臨床観と現実の差に傷つく〉の結果と考察

〈自分の臨床観と現実の差に傷つく〉とは，「自分の臨床観とは異なる臨床の現実に触れて傷つくこと」である。分析対象者２名，３つのバリエーションから生成された概念である。以下，詳細を述べる。分析対象者の具体的な語りは「」内に*イタリック体*で表記する。

「*実習場面はね。EAP の所に行ったときは，何だろうな，企業だったから，何かね，企業内のごたごたを知って，病院とリワークをやるところと，企業側とリワークをやるところの連携でずれが生まれたりすると，喧嘩みたいな。なんかこう，リワークに意味があるのかって思ってる病院側とか，とりあえず送り込んでおけばいいや精神の企業とか，そういうところで，そういうエピソードを実際働いている人から聞いた時には，臨床って何なんだって思っちゃって。（中略）なんか，その人本人を助けるために皆動いているはずなのに，送り込めばいいやって来て，プログラムが終わったら，終わったからもう来れませんとか，契約のお金以内だから出しますって言って出して，あの人どうなったんだろうね～とか軽く皆言ってて，私がずっと中でやってきたケースとかはすごくじっくりクライエントさんと向き合うものだったからこそ，外に行くとこんなに冷たいものがあるのかって，ちょっと思ったりもして，そうだね。終わり際には，こういう部分もあるんだなって思ったけど，行って最初の方はずっと，心理の世界ってこんなに冷たいんだなって（笑）思ったかな。*」という語りから，実習場面を通して自分の育んできた臨床観と現実の差にショックを受けている様子が語られている。

この現象は，初期の概念〈臨床心理文化との出会いによるショック〉で臨床心理文化と出会い，臨床心理文化について理想的あるいは教科書的な価値観を育んできた院生が，実習場面で現実の臨床観と出会うというものになっている。理想的あるいは教科書的な価値観は現場の多様な現実に伴い変化していく。現実にある制限の中で実行可能な範囲の中の臨床を実行している現場を見てショックを受けるというこの現象は，今まで持っていた知識に肉を与えることになるのではないだろうか。その中で再び自分の臨床観がブラッシュアップされていくのだと考えられる。

3-5. 概念〈構造が守られないことから生まれる傷つき〉の結果と考察

〈構造が守られないことから生まれる傷つき〉とは，「構造が守られないことによって傷つくこと」である。分析対象者２名，３つのバリエーションから生成された概念である。以下，詳細を述べる。分析対象者の具体的な語りは「」内に*イタリック体*で表記する。

「*やっぱそういう風に教わってますしね。安全な場だし，秘密を守る。そりゃ確かにクライエントの秘密を守るのは当たり前のことなんですけど。でもこの場に出てるこの人たちの秘密を守んなくていいのかってその時は思ったんで。改めてだから，一人ひとりの発言に関しても，集団守秘義務なんじゃないかなって。ちょっと改めて思ったことではあったかな。（教わってるのに）そう，そこですよね。そこが矛盾感があった。そう，だから私たちのプライバシーは守られないのかみたいな（笑）そんな感じはあったかな。*」という語りのように，自分が教わっている構造が守られていない時には傷つきが起こってしまうことが伺える。

教員も人間であるので，定められた原則を破ってしまうことも起こり得る。インタビュー

データからは院生にとってそれが傷つきにつながっていることが示唆されている。原則として決まっていることが現場では破られてしまっていることを，体験者の生の声から集めるのは意味がある事だと考えられる。自己内省を行う際に自分と直面し傷ついてしまう事を内側の傷と例えると，この現象は外側から傷つけられると言えるのではないだろうか。実際に傷になってしまう場合，その傷を癒していくことも必要になり，その程度によっては自己内省が止まってしまい，その傷とそれをとりまく人間関係に囚われてしまうリスクも考えられる。まして傷つけられたと認識した相手が教員となってしまうと，院生に疑心が生まれるなど，学びに支障がでてしまうことが考えられる。こうしたことからも，大学院運営側に構造を守ってもらえることで安心して院生は学びを深めていけることが考えられる。

また，この概念については，他の分析対象者の中でも概念名と定義的にはあてはまる語りではあったものの，バリエーションとして抽出することを見送った語りもいくつかあった。その理由は口外しないでほしいと頼まれたからである。その頼みの中には，構造が守られていないことを自分が言ったことが特定されてしまうというような恐怖もあるのではないだろうか。これは傷つきが生まれているものの，公に抗議も表現もできないという現実があるということを示している。そうした状況も重要な現実だということを強調しておく。

3-6. サブ・カテゴリー《未熟さから起こる学びの滞り》の結果と考察

《未熟さから起こる学びの滞り》は「院生が自分と直面できないこと，恐れて実行できないことにより学びが滞ること」である。このサブ・カテゴリーは〈限界を許せずに抱いてしまう怒り〉，〈カンファで傷つきたくないためにかかる主体性へのブレーキ〉の２つの概念から構成される。以下，詳細を述べる。分析対象者の具体的な語りは「」内に*イタリック体*で表記する。

〈限界を許せずに抱いてしまう怒り〉とは「自分の限界について怒りを用いることで見ないようにしてしまうこと」である。分析対象者３名，４つのバリエーションから生成された概念である。「*変なプライドがあったんでしょうね。気づかなかったけど。そういうところで非常に，その時はもう，実習嫌だみたいな感じになってましたね。（中略）行きたくないって感じになってきて。すべてがネガティブに見えるんですよ，そうすると。ちょっと言われただけで，いじめてきてるとか。すごい気に入らないんだきっと，私のことが気に入らないんだって。ネガティブな自動思考が起こって（笑）みたいなかんじでもうそっから悪循環で。（中略）それはなんか，やっぱり同期に話したりして。そう，同期に話すってことをまずやって。要するに愚痴るわけですよ。愚痴って，行きたくないって。そうすると皆聞いてくれるから，それである程度すっきりしたっていうか。別に批判されるわけでもないし。（中略）同期と話すことによって，気持ちが落ち着いてきて。切り替えができたのかな。自分の中で切り替えができるようになって。そうか，要するに今自分は自信を無くしているからこんなに腐ってるんだってことが分かったから，自信をじゃあつけるためにはどうしたらいいのか。そうか子供のことに関して勉強すればいいんだって，実習は子供へ関わるものだったから。じゃあ，子供に関して勉強して知識をつけることで，自信をつけようって勉強することに切り替えたんですよ。そして勉強をすることで知識を身に着けていくことで，徐々*

に自信というか，見る目が変わってきた。そこの臨床にいることで，対スタッフに向いていた視点が，子供に切り替わっていって。子供の観察をしっかりして。ああこれが本で言ってたこれかとか，そういう風に視点が変わっていったりとか。そういうことで少し持ち直して。」という語りから，自分の無力さ，自身の無さを受け入れることが出来ずに怒りを用いてそのことを見ないようにしてしまう様子が語られている。

〈カンファで傷つきたくないためにかかる主体性へのブレーキ〉とは「ケースを持ち始めてからカンファで相手を傷つけたり，自分が傷ついたりすることを恐れてしまい，自分の感覚を確かめられないこと」である。分析対象者２名，３つのバリエーションから生成された概念である。「*きっと２年生になると，何だろうな，そこを突っ込むことで未熟さの指摘になったりする時もあったりするし。（中略）自分が未熟だから，想像できてなかった部分，想像できてない部分もあるんだろうなとか思うけど，言えなかったりする。（中略）うーん，想像できてないんだってことにぶち当たる気がするというか。言ったらリアクションが帰ってきて，ああなんか自分が思ってたよりも深いところ考えてるんだなって。レスポンスで傷つく。傷つきそうだなーみたいな。*」という語りから，ケースを持ち始めてからカンファの場で相手に意見を述べることで自分が相手を傷つけてしまうことや，自分自身が未熟さを露呈し傷ついてしまうことを恐れる気持ちがあると語られている。

本サブ・カテゴリーでは自分の無力さとの直面できなさが〈限界を許せずに抱いてしまう怒り〉によって表れていることが示唆されている。また，院生同士，人との関わりにおいて起こる傷つきとの直面できなさが〈カンファで傷つきたくないためにかかる主体性へのブレーキ〉として表れていることが示唆されている。

中期の院生は２年生となり，初期にすでに味わっていた未熟さが蓄積されていると考えられる。一人で抱えられない量の重さを抱いたまま，それに対処しないまま，それについて深く考えずに，それに苦しんでいる自分を認めてあげられない場合，〈限界を許せずに抱いてしまう怒り〉となってしまうのではないだろうか。そしてそれは学びの滞りへと繋がる。また，〈カンファで傷つきたくないためにかかる主体性へのブレーキ〉では，クライエントのため，院生の感性の研磨という目的で行われているカンファ場面で，発言することによって相手を傷つけてしまうかもしれないことや，自分が未熟さを露呈し傷ついてしまうかもしれないことなどを恐れ，本来の目的の進行が妨げられてしまうという状況になっている。

〈限界を許せずに抱いてしまう怒り〉では，自らの課題に向き合うことができず，他のものへ怒りを抱いてしまうという現象であり，内省が求められる大学院生の学びを妨げるものになると考えられる。語りの中にプライドという言葉があるように，妨げの中にはプライドが関わっていると考えられる。小塩（1998）は自己愛傾向とは，自分自身への関心の集中と，自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚，さらにその感覚を維持したいという強い欲求と定義している。自らに課題があると認めることは痛みを伴うことがある。初学者である院生に課題があるのは必然であるが，院生にとって課題があるという事を認めるという事は，自分自身に対する肯定的感覚の維持の妨げになり得る。これは自己愛が傷つくと表現できるのではないだろうか。Kohut（1972）は自己愛的怒りについて，自己愛的な期待にその人自身や他者が添えていない時に発生すると述べている。この現象はそうした自己愛の

傷つきから身を守るために院生が怒りを用いていると考えられる。また，この現象からは大学院での学びの場面，ケースや実習などでうまくいかないことに出会う際に院生の自己愛を傷つける何かが存在するということが示唆されている。院生は臨床心理士を目指して大学院へ入学する。その中でうまくいかないことと出会うということは，自分が初学者であること，同時に今の自分のままではいけないということでもある。今の自分のままではいけないという状況が，自信を喪失させ，自己愛の傷つきを招いているのではないだろうか。院生自身も学生相談室などのサポート機関の積極的な利用が必要だと考えられる。

〈カンファで傷つきたくないためにかかる主体性へのブレーキ〉では，語りから院生がカンファの場で他の院生の未熟さを指摘することにより傷つけてしまうことを恐れたり，自分自身の未熟さを感じてしまうことを恐れたりすることによって，発言する主体性が妨げられてしまう事が読み取れる。未熟さをカンファの場で晒すことには恥が伴うことが考えられる。この現象でも院生は自己愛が傷ついてしまう事を恐れ，自分を防衛するためにカンファで発言することにブレーキをかけ，本来の目的が妨げられてしまっている現象だと考えられる。

3-7. 概念〈忙しさによる自己内省の余裕の無さ〉の結果と考察

〈忙しさによる自己内省の余裕の無さ〉とは，「忙しさから自分を見つめる余裕がなくなること」である。分析対象者３名，３つのバリエーションから生成された概念である。以下，詳細を述べる。分析対象者の具体的な語りは「」内に*イタリック体*で表記する。

「*実習ではこの時２つくらい，３つか。まあ３つ目は実習じゃなくてアルバイトだったんですけど。（中略）自分が何もできねえなってところは。何もさせてもらえないんだけども，それも頷けるくらい自分でも思っていて，傷つきというか，あきらめ？　何て言うんですかね，ここでも傷つきって何だろうって思ってしまうんですが。（中略）付き合い方については，特にそれを味わって，味わっていたって程ではないですかね。そんなに真剣にそれに向き合ってなかったと思うんですけど。ただ，ただただ行ってたみたいな。ただただ役に立たない日々を過ごしていたって感じですかね。（中略）同時期に３つも始めちゃったんで，考える余裕がなかったので，なのでただただという言葉を使ったんですけど。そうですね，何かあったというか，そういうことですね。忙しかったという話です。*」という語りから，忙しさから自己内省を進めることが出来ずにいた様子が語られている。

臨床心理士を目指す大学院生は，授業に実習，面接，修士論文の作成など２年間の内にやることが多くある。自己内省が求められる中，忙しさというものがそれを妨げていたと言う語りがあった。それは院生にとって過度な自己注目に陥ることを防ぐような意味でもあれば，自己内省の滞りによって学びの妨げとなっているような意味を持つ現象になっている面と両面あると考えられる。また，こうした自己内省の滞りや深まらなさによって〈限界を許せずに抱いてしまう怒り〉のような現象が起こるリスクがあるとも考えられる。

3-8. サブ・カテゴリー《時間経過による不安と焦り》の結果と考察

サブ・カテゴリー《時間経過による不安と焦り》は，「時間経過によって院生に生じる現

在，将来への不安と焦り」である。このサブ・カテゴリーは〈時間経過に見合う人になれているかの不安〉，〈未熟なまま職業人として進みだす不安〉という２つの概念から構成される。以下，詳細を述べる。分析対象者の具体的な語りは「」内に*イタリック体*で表記する。

〈時間経過に見合う人になれているかの不安〉とは「時間の経過と共にそれに見合う院生になれているかの不安がカンファの場でそれが表出すること」である。分析対象者５名，５つのバリエーションから生成された概念である。「*一年生の頃，最初の頃は別に，皆が間違えてたって自分も初心者だからいいかなって感じがあるから，そこまで大したこと言えなくても。大したこと言えなくてもいいけど的得てないといけないんだけど。そういう感じかな。的を得てはいたいけど，この人たちの中ですごく優秀なことは言えなくてもいいわけですよ。一年の最初の頃は。でも，やっぱり重ねていったら，経験を積んでるんだからやっぱりきちんとした，なんていうかな，まあ的を得てはいたいけど，そういう観点合ったねって，ちょっと周りに尊敬されるような，さすが先輩。さすが，１年生から見たときに，２年生はさすがケースを持ってるとか，そういう経験に応じたことをきちんとできてるっていう風に思われたいなっていうのはあるから。渾身の一撃を（笑）渾身の一言を言いたい（笑）それがあったね！　おお！　みたいな。*」，「*なんか言えないんだよね。なんだろうね。なんでなんだろう。なんでそんなに詰まってたんだろう。あ，あのー先生たちの偉大さを感じはじめてて。最初の方はザ先生みたいな。もう，何だろう。専門的な所のベテランというのでなく，教えてくれる先生みたいな感じで見てたけど，色んな先生と話したりして，この人たちはプロだ，みたいな。思い始めたらその人たちの前で発表することがすごい，嫌だった。（中略）なんかね，何でも先生が言っていることが合っている気がするんだよね。先生が何か喋った後に自分が何か発言するのは，軽い言葉な感じがしちゃって。うーん，なんか先生達以上に経験とか知識もないし，みじめっていう感じ，それって。自信がないからこそ言えないよね。あとは言った後にいつもちょっと後悔する。*」という語りから，後輩と教員から２つの立場の人間からカンファの場でプレッシャーを感じている様子が語られている。

〈未熟なまま職業人として進みだす不安〉とは「今の自分ではまだ職業人として未熟と思い不安になること」である。分析対象者３名，３つのバリエーションから生成された概念である。「*このまま本当に仕事として，スタートしてしまって大丈夫なのかなって。このままずって社会に出てしまって，これでいいのかなっていう感じ。何だろう。大学院で勉強する期間が終わって改めて考えると，あまりに未熟すぎる気がして。出ていくには。って考えると，なんかそういう自分の中の踏ん切りのつかなさ。それで生きていくんだって覚悟を決められない感じって言うんですかね。それを就職が近づけば近づくほど，普段からそれを考えるようになってたかなって思いますね。（中略）やっぱり，勿論色んな方からアドバイスとか教えてもらったりとかあっても，カウンセリングは自分の力，一人でやらなきゃいけない。大学院生が担当してますとか，実習生が担当してますとかでなく，一人の職業人になるので。そこに耐えうるものを持ってない気がして。出るのがすごく怖かったですね。*」という語りから，卒業を近くに感じ，今の自分が現場でやっていくには未熟であると思い，恐怖を感じているという様子が語られている。

〈時間経過に見合う人になれているかの不安〉では，カンファ場面で後輩からは１年先輩

として，教員からは専門家としての視線が注がれ身動きがとりづらくなっていたことが語られていた。時間経過の分院生にはプレッシャーがかかっていることが考えられる。1年間院生にとって，初期には《ケースに出る未熟さ》，中期には《未熟さから起こる学びの滞り》などのサブ・カテゴリーにある現象によって自分が未熟であることと直面する経験が積み重なっていると考えられる。Davies（2009/2018）では心理療法家になろうとする訓練生が感じている評価への不安は，スーパーヴァイザーから実際に起きた迫害によって生じるというよりも訓練生の「仮定」や「想像」に対する恐怖であると述べている。教員はカンファやSV場面で臨床心理士を目指す大学院生に成長するよう指導を行う。終期の院生はこれまでの大学院生活が1年間時間経過したという立場にあることよって，カンファの中で自分がどう見えているか，マイナスな仮定や想像をしてしまい身動きがとりづらくなってしまっているのではないだろうか。

院生の不安を助長させていることについてDavies（2009/2018）は指導者のみが「知」を有しているという非対称性によって，訓練生が傷つきやすくなり，表向きは当たり障りのない行動に，無意識の破壊的な動機を想定するような指導者の発言に訓練生は敏感であり，訓練生はそうしたものから精神分析的な概念を使って身を守る資格がない初心者であるという立場が関係していると述べている。院生は指導者との非対称性な関係性の中にいながらカンファの場では初学者として試されるような雰囲気を感じ，そのことが身動きを取りにくくしていると考えられる。これは院生の不安の想像だけでなく，大学院という組織の在り方も関わっていると考えられる。

3-9. サブ・カテゴリー《深化する自己内省に伴う痛み》の結果と考察

サブ・カテゴリー《深化する自己内省に伴う痛み》は，「大学院終期に深まってきた自己内省によって起こってくる痛み」である。このサブ・カテゴリーは〈薄々分かっていた自分との直面〉，〈自己変容へのストレス〉という2つの概念から構成される。以下，詳細を述べる。分析対象者の具体的な語りは「」内に*イタリック体*で表記する。

〈薄々分かっていた自分との直面〉とは「自分について薄々は分かっていたものが養成課程で意識化されてくること」である。分析対象者3名，5つのバリエーションから生成された概念である。「*多分ずっとその癖はあったはずなんだけど，その間にいろんな課題があったから，ちょっと隠れてたんだと思うんです。他の色んな課題っていうのは，トレーニングの間で対策されて，それが落ち着いたらまた癖が露呈してきちゃって。最初の時からその癖っていうのはあったけど，露呈したんだ最後の時に。（中略）多分，自分の中でカウンセラーとして致命傷ぐらいに思ってるんですよ。*」という語りのように，養成課程の中で自分の中に元々あった課題が段々と意識化される様子が語られている。

〈自己変容へのストレス〉とは「大学院で訓練を受けている中学んだことが日常生活に影響し，それにストレスを感じること」である。分析対象者3名，3つのバリエーションから生成された概念である。「*何でも深く考えるようになっちゃった（笑）割と適当な性格で，別に何だろうな，さっぱりしてたわけではないんだけど，割とポジティブというか，さらっと何とかなるだろうみたいなところが多くて。けどなんか，1個1個に真剣に考えて，きっ*

とこういう風に思ってるかもしれないとか，想像しちゃう。そうだね，優柔不断になった気がする。（中略）自分こんなこと考えてたっけとか思って。なんか，自分らしさがちょっと失われた感じがするかな。これは本当に最後の方に思った。今までの自分らしさと今の自分らしさってちょっと違うなって思って。（中略）ちょっと，前の方が好きだったかなって。そう，傷つきというか，寂しいなって。（中略）それが習慣化しちゃってるんだよね。考えることが。しかもより感じ取りやすくなっちゃって，身動きが取れない。恋愛とかすごい思う（笑）大変（笑）なんかすごい恋愛ってさっぱりしてて元々。なのになんかこう，ね，駆け引きじゃないけど，なんかね（笑）本当大変（笑）相手は本当はどうしてほしいのかなとか考えて，自分はどうしたいのかとかも考えて，この相手のどうしてほしいと自分のこうしたいがちょっと合わないなーとか。（中略）うーん，専門的には良いのかもしんないけど，生きづらい。（笑）」という語りから，大学院でトレーニングされる中で自分らしさに変容が起こっており，それにストレスを感じている様子が語られている。

自己内省が求められる大学院において，終期に出てきた自己内省によって起こる痛みをまとめたサブ・カテゴリーである。自己内省には痛みが伴うものもあると考えられるが，インタビューを進めていく中では終期に元々の自分自身についてと，大学院に入ってから変わってきた自分についての語りが見られた。

〈薄々分かっていた自分との直面〉では，元々存在していた自分自身についての薄々は分かっていた傾向が終期になっていくにつれ意識化されてくる様子が語られていた。これは初期や中期では主に臨床心理士になるための態度，振る舞い，価値観など外部，内部実習があるために優先度が高く重要度も高いものから整理されていき，終期になってきて個人的な部分・優先度は低いが重要度は高いものゆえに無視することはできない部分に気づいてくるという構造があると考えられる。この現象では元々の自分に対して大学院での学びが活かされ，内省が行われているものだと考えられ，自己内省が深まってきていることが示唆されている。

〈自己変容へのストレス〉では，トレーニングの過程の中で深く考えるようになり，そのことについて寂しさや生きづらさを感じている様子が語られていた。Rogers,（1957/2001）はセラピストの純粋性について，現実に経験していることが，自分自身の気づきとして正確に表現されていなければならず，セラピストはクライエントとの関係の中で，一致して（congruent）おり，純粋で（genuine）あり，統合している（integrated）人間でなければならないが，生活の全局面において同じ程度の統合性や全体性を示すような模範である必要はないと述べている。院生はセラピーで経験することについてクライエントとの関係の中で一致できるように努める。あくまで努めるのはセラピストとクライエントとの関係の中であって，生活の全局面において純粋性を保った在り方である必要はないのであるが，その在り方が日常生活にも影響している現象であると考えられる。セラピーで行われるのは対話であり，日常生活でも行われているものであるので，そのトレーニングの影響が日常生活にも出ているというのはトレーニングの成果でもあると言える。それで生きづらさやストレスを感じるというのは，臨床心理士になるためのある意味で税金のようなものなのかもしれない。

3-10. 概念〈仲間という安全地帯へ一時避難する〉の結果と考察

〈仲間という安全地帯へ一時避難する〉とは，「傷つきについてお互い分かち合いながら，自分の傷つきと距離を取ること」である。分析対象者３名４つのバリエーションから生成された概念である。分析対象者の具体的な語りは「」内に*イタリック体*で表記する。

「*そうですね，全体を通すと，やっぱり，同期の存在が大きくて。私は全体的に言うと，そういう体験をしたときに一人では抱えられないから。すぐ喋っちゃう。つらいことがあって嫌なことがあったってなったら，ぱって人に行ってしまうんだけど。ここだったら，同期は皆カウンセラーの卵だから話を聞いてくれるわけですよ。そこに甘えて，甘えてたのもあるんだけど，大きかったかなその存在が。同期っていう存在が大きくて。次に助手の先生がすごく大きくて。中々指導教授に相談するような内容でもないし（笑）間にその２者がいたことで，話すってことで解消してたってかバランスを取ってた。嫌だなって思うことでもあるし，自分の中で治らない癖だってことも知ってるし，嫌は嫌だけど。でも話したりしている内に，そこが中和されるっていうか，落ち着くっていうか。それでもいいんだって思える時とかもある。同期の話とかも聞いてれば。同期も頑張ってるし。自分だけじゃなくて，同期も自分のダメなところと闘ってるわけで。そういうのをやっぱ，共有することで，うまいこと，無くなりはしないけど，バランスを取ってたのかなって。（中略）中和，許容できるようになるっていうか。そう，そう。ちっぽけなことに思えることもあるし。それはタイミングによって違うけど。多分客観的な大きさは変わらないんだけど，見る位置が変わったり，距離が変わったりして，小さくなったり大きくなったりしながら。目の前にずっとここにあったらすごくつらかったけど，遠くにおいてみたりとか，見方を変えたりってできたかな，同期と話して。そう，だから物自体の大きさは変わらないけど。うん。そうですね。*」という語りから，同期に話を聞いてもらうことで一人では抱えられなかったことを自分の中で見つめられることが出来るようになっていく様子が語られている。

山田・小林（2018）では，看護系大学の学生が臨地実習を通して「個人の特性」のコンピテンシーを形成していくプロセスについて M-GTA を用いて研究し，スキルや自己イメージなどの具体的なコンピテンシーより奥にある，開発困難とされている個人の特性についての部分には，似たような環境にある学生との会話により，〈同じだからわかる〉という概念が関わっていることが考察されていた。臨床心理士を目指す大学院生でも，似たような環境にある院生同士の会話により分かり合っていることが語りから伺える。また，語りからは同期に甘えてという表現も出ていた。語りの中には「*要するに愚痴るわけですよ。愚痴って，行きたくないって。そうすると皆聞いてくれるから，それである程度すっきりしたっていうか。別に批判されるわけでもないし。そうすると何となく徐々に落ち着いてきて。*」など，批判のない関係に逃げ込んでいるような様子も語られていた。同期に話をするということの役割の１つとして，甘えられるということもあるのではないだろうか。大学院生活の中では自分の弱さに直面することもある。一人では抱えきれない場合もあるだろう。そうした時に甘えることを通して一旦混乱状況から落ち着くことができることが示唆された。

Ⅳ．総合考察

これまで，臨床心理士を目指す大学院生の学びに関する場面での傷つきにまつわる体験との付き合い方の過程について，M-GTA によって分析した結果と考察を述べた。

院生は臨床心理士を目指して大学院に入るが，その過程の中では失敗や，できないことを多く経験する。初期では《臨床心理学の文化の入り口に立つ》ところで臨床心理文化の価値観や，実習でどう振舞ったらいいのかなど，初めて出会うものに順応するために傷つきにまつわる体験を経験することが示唆された。また，《ケースに出る未熟さ》ではクライエントを傷つけてしまう自分に対して，傷つきにまつわる体験をすることが示唆された。そして，〈授業での分からなさを不安に思う〉の語りにはこのままの自分で将来やっていけるのだろうかという不安も語られていた。初学者としてはこうした経験，不安を持つというのは本来当たり前の事なのである。しかし，それは今の自分が目指すものには程遠く，このままでは臨床心理士になれないのではないかという不安との直面を意味する。すなわちそうした体験の処理には今の自分の在り方の否定も行われるのではないだろうか。今の自分の在り方の否定は自己愛への脅威となるために，中期には〈限界を許せずに抱いてしまう怒り〉という現象が起こっているのではないだろうか。この現象は臨床心理士を目指す大学院生にとっては重要な概念だと筆者は考える。富樫（2019）によれば，Kohut（1972）は自己愛憤怒には一時的に自己の断片化や崩壊を防ぐ機能があると述べている。今の自分の在り方の否定とは自己の断片化や崩壊の危機と言える。これは，〈限界を許せずに抱いてしまう怒り〉で院生には自己憤怒が生じており，その危機から身を守っていると考えられる。また，富樫（2019）は自己愛憤怒は相手の主体性に向けられると述べている。セラピーをする際に自らの断片化や崩壊の危機に無自覚であった場合，クライエントにとってもセラピストにとっても困難になるのではないだろうか。筆者も，クライエントの事が分からないことが認められない，そして認められない気持ちを許すことが出来ないなど，自分自身の限界を認められずに学びが妨げられることに出会っている。〈限界を許せずに抱いてしまう怒り〉ではインタビュー対象者の語りではケース，実習，院生同士の関係等で起こっていることが語られている。これから臨床心理士を目指す大学院生にとってこの現象が起こることは考えられる。こうした現象が起こることを知っておくことは意味があることだと考えられる。

インタビュー対象者は自分自身の限界と出会い，そしてそれを助けるものの内の１つが〈仲間という安全地帯へ一時避難する〉ことだと示唆されている。インタビュー対象者に見られたのは，同期という逃げ込める場所に避難し，同じように限界と出会っている同輩らに話を聞いてもらうことで，外在化を行い自分の抱えている問題を認識しやすくし，再び現実の辛いところへ戻っていくという流れであった。この過程も自分の限界を認められない際に役立つものとして示唆されていた。また，他にもデータ数が少なく，概念化出来なかった付き合い方としては日記にその日辛かったことを書くというデータもあった。

教員から見ると初学者であるから当たり前の過程を踏んでいると見えるのかもしれないが，院生はそんな自分について無批判ではいられないのかもしれない。そのため，教員からの配慮も必要だと考えられる。また，院生自身も傷つきが起こる際には見ないようにしてし

まいたくなる現象がある事を自覚し，同輩や学生相談室などの相談機関などに話してみる，あるいは紙に書いてみるなど外在化を行えると，その現象と出会った際役立つと考えられる。

割澤（2016）では，臨床心理士指定大学院における学生の学習プロセスの個人差に関する研究を M-GTA を用いて行っていた。本研究との類似が見られる点について述べていく。

「専門知識や他者の助言を絶対視し，自身の感覚や判断を過小評価すること」という定義の概念，〈知識や助言の絶対視による信頼できなさ〉が，本研究の〈SVor. の助言を鵜呑みにする〉と類似していた。助言を絶対視し自身の感覚や判断を過小評価するという点が類似している。割澤（2016）はこの現象の過程にいる人達には具体的・現実的な指摘がサポートになるとは限らず，より「専門家として未熟な自分」の感覚や判断の信頼できなさの実感を強める一因になると考察している。本研究でも〈SVor. の助言を鵜呑みにする〉は〈ケースを通した自分の未熟さに傷つく〉へ影響しており，自身の未熟さの実感を強めていると考えられる。

また，「不安，緊張，気負い，価値観など，自身の思いが先行し，CL の思いに十分に目が向けられていなかったことを自覚し修正を試みること」という定義の概念，〈CL よりも自身の思いが先行した関わりの自覚と修正〉が，本研究の〈ケースを通した自分の未熟さへの傷つき〉では不安や，気負いなどの思いが先行し，CL の思いに十分に目が向けられていなかったことを自覚する点が類似している。こちらのインタビューデータでは院生の準備不足から中断してしまったケースも見られた。

割澤（2016）では学びのプロセスを検討したが，院生の日常生活への学びの影響は検討されていなかった。本研究ではインタビューにより，大学院での学びには〈自己変容のストレス〉で，日常生活にまで大学院での学びが影響していることが示唆された。

Ⅴ．本研究の問題点と今後の展望

本研究では対象者は，5 つの第 1 種指定大学院卒業 3 か月以内の 10 名にインタビューを行った。狭い範囲の対象となったため，結果を一般化するのは困難である。対象校，対象者の拡大をすることでより一般化しやすくなると考えられる。また，今回は対象者の属性について，社会人入学者と学部からそのまま進学した者を分けずに調査を行った。しかし，体験の質は異なることが示唆された。ここから，社会人経験者と学部進学者それぞれ対象を絞って研究を行うことで，それぞれの属性について詳細な仮説生成に役立つことが考えられる。

【引用文献】

土居健郎（1991）専門性と人間性．心理臨床研究．第 9 巻，(2)，51-61.

今田雄三（2013）．セラピスト養成における現代的な問題とその対応―関係性が成立困難な時代に育った世代への指導を通して―鳴門教育大学研究紀要　第 28 巻，307-320.

岩壁茂（2007）．心理療法・失敗例の臨床研究　その予防と治療関係の立て直し方　金剛出版.

James Davies（2009）．The making of psychotherapists. Karnac Books. London. 東畑開人（監訳）（2018）心理療法家の人類学 —— こころの専門家はいかにして作られるか 誠信書房．222-234.

木下康仁（2007）．修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）の分析技法，富山大学看護学会誌 第6巻(2)，1-10.

Kohut H（1972）Thoughts on narcissism and narcissistic rage, In: PH Ornstein（Ed）The search for the Self, Vol. 2. Connecticut: International Universities Press. Pp. 615-658.（林直樹　訳（1996）自己愛と自己愛憤怒についての考察―自己心理学とヒューマニティ．金剛出版，148-182）

久羽康（2018）．心理臨床の一側面について神奈川大学心理相談センター紀要　心理相談研究　第10巻，45-55.

村上静・守屋英子（2013）．被虐待児・非行傾向のある子どもとの関わりで体験する不安・戸惑い・傷つき：一時保護所の宿日直員（嘱託）のインタビュー分析　茨城大学教育実践研究，第32巻，243-256.

大橋正子（2016）．臨床心理士養成過程2年間を通しての自分を見つめる自己理解の変容　神奈川大学心理相談センター紀要 心理相談研究　第8巻，41-63.

小塩真司（1998）．青年の自己愛傾向と自尊感情，友人関係のあり方との関連 教育心理学研究，第46巻，280-290,

Rogers, C. R.（1957）. The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality　change. Journal of Consulting Psychology, 21(2). 95-93. 伊藤博（訳）（2001）．セラピーによるパーソナリティ変化の必要にして十分な条件．伊藤博・村山正治（監訳）．ロジャース選集（上）．誠信書房，265-285.

Sullivan, H.S.（1953）. The Interpersonal Theory of Psychiatry. New York: W. W. Norton & Company. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鑪幹八郎（訳）（1990）：精神医学は対人関係論である　みすず書房，172-195.

富樫公一（2019）．我を生かすために他者を破壊する―自己愛憤怒 臨床心理学 第19巻(1) 48-53.

割澤靖子（2016）．臨床心理士指定大学院における学生の学習プロセスの個人差に関する研究 教育心理学研究 第64巻(1)，41-58,

山田恵子・小林紀明（2018）．看護系大学の学生が臨地実習を通して「個人の特性」のコンピテンシーを形成していくプロセス 日本看護研究学会雑誌 第41巻(5)，841-851.